

伊勢湾台風復興住宅

—— 干拓地の歴史と共に歩んできた住まい

Restoration Housing After the Ise Bay Typhoon - Homes Shaping Up with the History of the Reclaimed Land

1959年に発生した伊勢湾台風。

全国的に大きな被害をもたらしたが、紀伊半島から東海地方にかけてはとくに甚大な被害を被った。

愛知県鍋田村（現弥富市）で大規模に干拓された鍋田干拓もその一つであり、

台風が引き起こした高潮により入植直後の在住者318名のうち133名の命が失われ、

干拓地も海に帰した。災害後の復興では、住民自らが施工を行う復興住宅が建設されている。

伊勢湾台風の復興住宅を研究している堀田典裕さんに住まいの再建を中心にお話をうかがった。



鍋田干拓に残る復興住宅。住みこなされ、さまざまな増改築パターンがみられる。1. スケルトンがほぼオリジナルの状態に残る 2. 外壁を住民の好みの色で塗装 3. 屋根スラブの補強、外壁の塗り直し、下屋・納屋の増築 4. オリジナルに似せた材料、デザインで増改築 5. 隣に木造の家屋を建設 6. 隣にRC造の家屋を建設 7. 周囲を覆うように木造を増築 8. 作業場・倉庫等を増築（撮影：会誌編集委員会）



堀田典裕 | Yoshihiro Hotta
名古屋大学大学院環境学研究科准教授／1967年三重県生まれ。名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。日本学術振興会特別研究員、デルフト工科大学建築学部研究員、名古屋芸術大学非常勤講師などを経て現職

聞き手

岩佐明彦 | Akihiko Iwasa
法政大学／会誌編集委員会委員長

佃悠 | Haruka Tsukuda
東北大学／会誌編集委員会委員

前田昌弘 | Masahiro Maeda
京都大学／会誌編集委員会委員長

佃悠＝文



fig.1 竣工直後の鍋田干拓の「伊勢湾台風復興農村住宅」:
W.グロピウスの「テルテン・ジートルング」を想起する画一的な建築群を第二線堤防越しに望む (提供:堀田典裕)

—まずは堀田さんのご専門と、伊勢湾台風を研究対象とされた経緯についてお聞かせください。

私の専門領域は建築学の「歴史・意匠」分野で、建築の歴史と意匠の境界領域における理論と実践について考えています。元々、都市・造園・建築・家具というスケールを超える建築デザインのあり方を考えようとして、近代郊外住宅地の開発について研究して参りました。現在は、こうした考え方を発展させて、近現代建築の建築デザインを形態分析を通じて研究をしています。

伊勢湾台風を詳しく調べるようになったきっかけは、東日本大震災の報道で、津波から逃れた人たちが建物の屋上に避難しておられる様子を見たときに、伊勢湾台風で被災した母が屋根に避難したという話を思い出したからです。母はいまだに、春に田んぼに水が張られると、当時を思い出して怖いと言います。建築の歴史・意匠の専門家として何ができるのかを考えたとき、以前から気になっていた伊勢湾台風の復興住宅の研究に取り組もうと思いました。また、留学していたデルフト工科大学の講義で聞いた、低地の都市と建築の関係についても興味を持っていました。関連する資料調査と、現地での実測調査と聞取調査から「伊勢湾台風復興住宅」の建築デザインの特徴について明らかにしました。

—伊勢湾台風の被害と復興の特徴についてお聞かせください。

伊勢湾台風は、1959年9月26日に東海地方を襲った台風で、最高潮位3.9mという高潮が濃尾平野に大きな災害を引き起こしました。とりわけ、愛知県南部の「ゼロメートル地帯」と呼ばれる沿岸地域は甚大な被害を受けました。伊勢湾台風の被害は愛知、岐阜、三重の災害だと思われがちですが、実際は和歌山、滋賀、福井、石川、長野でも大きな被害が出ています。全国で5,098

名の死者・行方不明者、15万戸以上の全半壊住宅という甚大な被害でした。

こうした大災害に対して策定された復興計画のひとつである「名古屋防災都市建設計画」(1960)は、名古屋の街にとって3番目の先駆的都市計画だったと言えます。最初は、「大名古屋都市計画」(1923)。江戸以来の街の周囲に対して計画が行われました。石川栄耀がレーモンド・アンウィンにこの案を見せたところ、「水際にライフがない」と言われたという逸話が残っています。2番目は、「名古屋市復興計画」(1946)。戦災復興計画として、100m道路をはじめとする広幅員街路網を全国に先駆けて整備しようとした街の中心部を主な対象とした計画でした。3番目として、この「名古屋防災都市建設計画」があります。当時、東京ではオリンピック、大阪では万博といったイベントが都市計画のきっかけとなりましたが、名古屋では大きなイベントがなく、伊勢湾台風が新しい都市計画のきっかけになったともいえます。ここで、「ライフがない」と言われた水際を再び計画することになったのです。この計画では、地盤のレベルを危険度に合わせるという発想が基盤になっています。土盛りができない場合はピロティなどで床レベルを持ち上げることが盛り込まれており、土木と建築が一体となって考えられた先駆的な都市計画だったと言えます。

—復興住宅はどのようなものが作られたのでしょうか。

実は伊勢湾台風の1カ月前にも大きな水害があり、政府はこの2つの災害について、1959年12月に特例法を制定して予算措置を行いました。しかし、被害が甚大であったため、災害復興費で作られたものだけを指して、復興住宅ということはできません。私は、伊勢湾台風を契機として考えられた風水害対策防災住宅を、3つのタイプで捉えています。まず、「復興都市住宅」は、市街

地に地方公共団体や企業が建設したもので、集合住宅が多いです。次に、「復興郊外住宅」は、郊外、とくに丘陵地を造成して建設した戸建住宅で、移転者が公庫融資を用いて建てた住宅が多くありました。最後に、「復興農村住宅」は、低地に建設されたもので、鍋田干拓の住宅はこれにあたります **fig.1**。それは、家を失った入植者のために考えられた、補強コンクリートブロック造3階建の戸建住宅でした。「名古屋防災都市建設計画」では、復興住宅の理念として、公営住宅は用地を嵩上げし、鉄筋コンクリート造など堅牢なものをつくって防災の拠点とすることが謳われていますが、実際は補強コンクリートブロック造で建てられています。補強コンクリートブロック造が採用されたことについては、続く時代に鉄筋コンクリート造で公営住宅や企業社宅が建設されるまでの過渡期だったためと捉えています。

——鍋田干拓など水際の低平地で作られた復興農村住宅にはどのような特徴があったのでしょうか。

鍋田干拓は、第二次世界大戦後に、食料増産と失業者対策を目的とした土地開拓事業のひとつとしてつくられました。台風の高潮による堤防の決壊によって干拓地が海に戻り、入植者住宅の全144戸が流されました。その後、一から干拓地を復興することになりました。「オランダ式」と呼ばれた締切堤防（第一線堤防）に加え、集落を囲い込む第二線堤防が作られました。災害前は、散居村のように広い農地の中に住宅が点在していましたが、災害後は塊村のように住宅をある場所に集約して配置されました。

復興住宅の設計は、当時、東京工業大学の教授だった勝田千利（1908-81）が、重要な役割を果たしました。元々、鉄筋コンクリート構造が専門だったのですが、戦中に田邊平學（1898-1954）とともに耐爆構造の研究を行っていた責任を問われ、戦後は1960年代に建築環境工学と呼ばれるようになる直前の建築計画原論の分野に専門を変更しました。勝田が寒冷地の断熱性能と施工性能を考慮した農村住宅として考えていた補強コンクリートブロック造住宅が、伊勢湾台風の復興にも生かせるのではないかとということで、鍋田干拓、川口干拓、平坂干拓の復興住宅に採用されて、新たに設計されました。それぞれ、136棟、33棟、24棟が建設されています。日本建築学会『伊勢湾台風災害調査報告』（1961）によると、三重県桑名市の城南干拓で伊勢湾台風以前に建てられた1階をコンクリートブロック造、2階を木造合掌造とする住宅の高潮被害が軽微だったことが報告されています。このことが根拠となって、木造より風水害の被害が少ない構造ということで、補強コンクリートブロッ

ク造が採用されたようです。また、伊勢湾台風の5年前に、勝田は今和次郎（1888-1973）と一緒にヴァルター・グロピウス（1863-1969）と鼎談しており、この復興住宅は「テルテン・ジートルング」（1926-28）を意識してデザインされた様子がうかがえます **fig.1**。

——建設はどのように行われたのでしょうか。

被災後に家屋を失った居住者が一斉に建設することになりましたから、工務店などの専門業者だけでは人手が足りません。そのため、全ての住民が復興住宅の建設に携わりました。素人が施工する際に、工期短縮でき、施工精度を出しやすいということでコンクリートブロックが用いられたようです。「日本開拓協会ブロック建築指導所」から派遣された指導員が、コンクリートブロックの練り方や積み方などを指導しました。

勝田が考案した中空コンクリートブロックは、縦190mm横390mm奥行190mmの二穴です **fig.2**。壁の厚さは、断熱性能の向上よりも、施工するうえで素人でも鉄筋が入れやすいということが大きかったのだと思います。三穴のコンクリートブロックは、端部の穴を揃えないといけないので、水平をとることが難しくなります。二穴の方が素人でも施工精度をあげやすかったのだと思います。

——デザイン上の特徴にはどのようなものがあるのでしょうか。

3階建で、1階が物置と作業場を兼ねた農作業スペース、2階が食事室・居間・寝室・便所など主な食寝スペースでした。3階は図面では子ども室となっていますが、実際には浸水時の垂直避難用スペースとして考えられています **fig.3**。2階と3階は12段のコンクリートブロックが積まれています。1階だけは当初の5段積から住民の要望で9段積に変更されたそうです。浴室は1階に設けられたので、農作業の後、すぐに手足が洗えます。階段は屋内と、2階北側の玄関へとつながる屋外階段が設けられました **fig.4**。部屋の数や並びは入植者が最初に作った、木造平屋の「三間型民家」のプランとよく似ています。

2階南側には廊下状のバルコニーが設けられています。屋根は屋上に避難することを考えてフラットルーフが採用されています。庇は南側の軒の出が900mm、東西北側で400mmのものが、2階と3階に回っています。強風でも飛ばされないためにも水平とされたスラブ厚（150mm）の薄さと、小さな屋階をもつ3階建の建物ボリュームが、独特のプロポーションを生み出しています。ただ、建設当初は、外壁にモルタルが塗られなかったので、3階の壁面を雨が伝って、2階の室内中央がたびたび雨漏りしていたそうです。住民が後から施工業者に頼みモルタル塗ペイント仕上にした結果、パステルカラーの

華やかな風景になりました。

——現在の様子を見ると、増築なども行われていて、大きくアレンジされています (p.44)。

敷地がそもそも広いので、後から木造在来構法で隣接住宅や付属屋を増築するなど、住みながら独特の増改築が展開されています。機能的な面では、雨漏り対策や暑さ対策のためにスラブを厚くしたり、台所の狭さを解消するために水回りを増築したりしているものをよく見かけます。また、木造で増築した部分を主な居室として、もともとのコンクリート部分は洋間として使ったり、あるいは、隣に鉄筋コンクリート造で新しく住宅を建設したり、増改築のバリエーションはさまざまです。

——徐々に増築していったようなものでも開口の位置や大きさを揃えてみたり、増築部分とカラーレイアウトを揃えてみたり、こだわりがみえますね。将来の保存については、どのような議論がされているのでしょうか。

現時点で、鍋田干拓では38棟の復興住宅が残っています。被災を経験し、セルフビルドで建設した世代は、復興住宅に並々ならぬ思い入れがあります。しかし、子世代には古くて暑くて寒い住宅なので、取り壊されるケースが続いています。名古屋市博物館で開催された展覧会『治水・震災・伊勢湾台風』(2019)に1/20の模型を出展した他、いろいろな方面に働きかけていますが、保存に向けた動きは起きていません。

補強コンクリートブロック住宅は容易に壊すことができず、この建物を中心に増築を繰り返して来たことで、画一的なモダニズムの風景は一変しました。住みこなされてきた住宅の姿は、文字通り「成長する住宅」でした。また、濃尾平野南部の「ゼロメートル地帯」には外階段をもつフラットルーフの鉄筋コンクリート造の建物が多く見られます。それらは勝田の伊勢湾台風復興農村住宅のイメージが根付いた結果なのではないかと考えています。勝田が「現代の水屋」と呼んだ伊勢湾台風復興農村住宅は、干拓と水害を繰り返して来た濃尾平野南部の低地特有の文化的景観です。この建物が何らかのかたちで後世に残ることを願っています。

2023年7月2日現地、8月2日オンラインにて



fig.2 被災者が現地で練り固め積み上げた二穴コンクリートブロック (H190 × W390 × D190mm) : 施工がしやすいように二穴が採用され、穴には断熱材として新聞紙などが詰められた (提供: 堀田典裕)

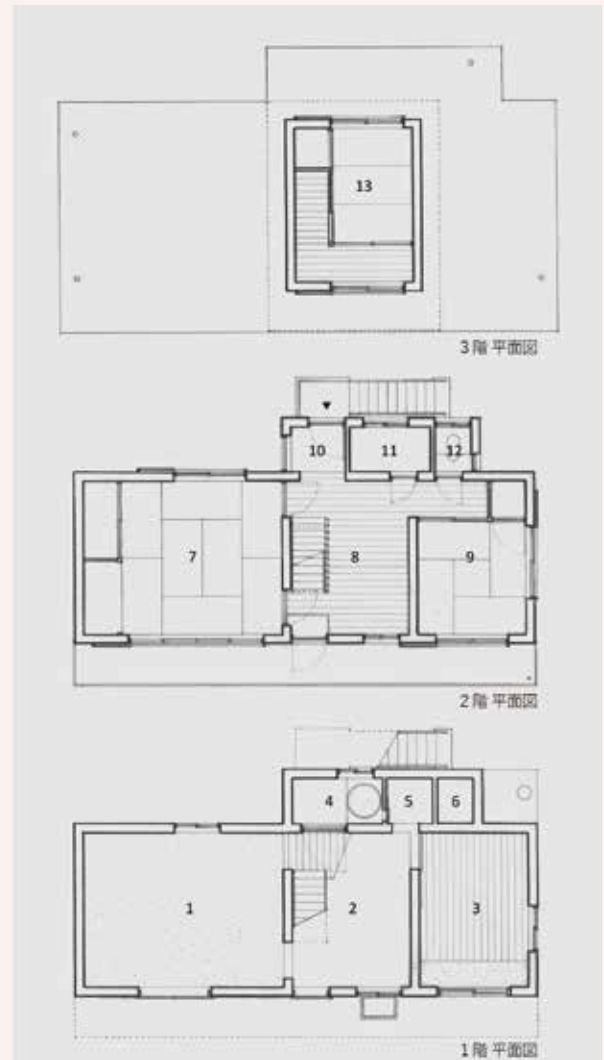


fig.3 鍋田干拓の「伊勢湾台風復興農村住宅」実測平面図: 1.2.3. 物置兼屋内作業場 4.浴室 5.焚口 6.便槽 7.居間 8.台所兼食堂 9.寝室 10.玄関 11.物置 12.便所 13.子ども室、図面上が北側 (提供: 堀田典裕)



fig.4 鍋田干拓の「伊勢湾台風復興農村住宅」実測断面図: 平坂干拓では堤防法面中腹から直接出入りできる住宅北側玄関が設けられた (提供: 堀田典裕)